今回が最終号になってもいいように書きました。あっもちろん発行人のとこじゃないよ：最終号で伝えるような話でもねぇーし。いや、まぁ発行人のとこは毎回別にどーでもいいつぶやきなわけだし、それにしても老眼がすんだ方が、よく見えんわい

自問自答　その24

令和５年２月10日（金）

広島市立己斐上中学校　進路通信

発行人：私が横向き、妻が仰向け、ポしが まん中にねるので ベッドの上が リアル「川」の字 状態になっている …の 川 ← 妻まっすぐ
私は脚まげてね3

「一生懸命」生きてみる

ご無沙汰でございます。進路事務に神経を集中した年末年始、気づけば皆さんが登校するのも残り20日を切りました。そしていよいよ来週が私立一般、月末の27日には私が51歳を迎えます。いや、公立入試だろ、そこは(-_-メ)

そんな皆さんに今回は「一生懸命」についてお話します。私には皆さんに伝えておかねばならない事情があるからです。

私が長谷川さん一家に出会ったのは今からもう30年近く前、真夏のエジプト、小さな町の小さな食堂でした。当時私はイギリスの日本人学校に勤務していて、夏休みを利用してエジプトを旅していました。長谷川さんはご夫婦と小さな女の子を連れた3人家族、真夏のエジプトは灼熱地獄になるので、小さいお子さんを連れての家族旅行は珍しいな～と思っていました。

たまたま食堂で出会い、食事を一緒にとることになったのですが、奥さんの裕子さんがしきりにこう話されるのです。「いいですね～、今、イギリスなんですか。若いうちにやりたいこと、やれることをとにかく一生懸命やってくださいね。」と。当時は私も大学を出たばかりの若造、「そうですね、そうですね。」とニコニコ相槌を打っていたのを覚えています。

話も盛り上がり連絡先を交換して別れ、日本（東京在住の方でした）とイギリスでしばらく手紙のやりとりを続けました。お互いの近況報告をしあいながら2年ちょっとかな。いよいよ私も広島に帰国することになり、教員採用試験に合格したことを手紙に書いて送ったら、いつもは裕子さんから来る手紙が、初めて旦那さん（隆さん）から届いたんですね。そこにはこう綴（つづ）られていました。

「お手紙ありがとうございます。そして採用試験合格おめでとうございます。一つ、増尾さんにお伝えしなければなりませんが、妻、裕子は永眠しました。実は増尾さんにエジプトでお会いしたとき、ガンの末期で、妻本人も余命が長くないことを知っておりました。それでどうしても妻が行きたかったエジプトを、家族で旅行することにしたのです。」と。

知ってたんだなぁ、裕子さん、自分の命がそう長くないことを。だからあんなに「一生懸命やってね、一生懸命やってね」と繰り返し話してたんだ。今できることに対して一生懸命、「今」を大事にすることがどれだけ価値のあることかを一生懸命伝えようとしてくれてたんだなぁって。

だからね、私は先生になったとき、「一生懸命」は伝えていかなきゃいけんなって思ったの。だって裕子さんが一人の人間として、次の世代にそれこそ命を懸けて伝えようとした思いでしょ。だから時々自問自答するんです。一生懸命生きてるかなぁ自分って。自分の言葉に魂は宿ってるかなぁって。